



TITLE:

十九世紀末の國際農業恐慌

AUTHOR(S):

靜田, 均

CITATION:

靜田, 均. 十九世紀末の國際農業恐慌. 經濟論叢 1931, 33(6): 894-907

ISSUE DATE:

1931-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130113>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經 濟 論 叢

號 六 第

卷三十三第

行 發 日 一 月 二 十 年 六 和 昭

論 叢

家屋稅移管問題 法學博士 神戶 正雄
景氣變動と前進變動 文學博士 高田 保馬

時 論

稅制整理を論ず 經濟學博士 汐見 三郎

研 究

米穀の生産費に關する一考察 經濟學士 八木 芳之助
指數吟味の基準 經濟學士 蜷 川 虎三
清算市場取引の二形式に就いて 經濟學士 今 西 庄次郎
十九世紀末の國際農業恐慌 經濟學士 靜 田 均
獨逸大銀行と中小工業金融 經濟學士 楠 見 一 正

說 苑

再び育子教諭書について 經濟學博士 本 庄 榮治郎
景氣變動の型よりドイツの失業 經濟學士 松 岡 孝 兒
中世の都市財政 經濟學士 大 谷 政 敬

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十三卷總目錄

十九世紀末の國際農業恐慌

靜 田 均

前論においてわれ／＼は、ゼーリングとスツデンスキイとを對質せしめることによつて、兩者の見解の相違を一應明かにすることができた。本論においてはさらに、兩者の抽象的理論および具體的説明の二つにわたつて、若干の考察を加へねばならぬ。

一、まづ農業恐慌の發生に關する理論的見地について。――すでに見たやうに、スツデンスキイは農業恐慌の周期的必然性、農産物價格と工産物價格との^{シミレ}缺差をばすべて技術的變革によつて一義的に基礎づける。彼は、技術的變革は『必然』に農業恐慌に導くといふ。しかし我々は、これに對してなぜ？といふ反問を提起しえないか。技術的變革はなぜ『必然』に農業恐慌に導くか？不幸にして我々は、その理由を納得することができない。スツデンスキイにあつては、『必然』といふ言葉以外に説明がないからだ。言葉のうへで『必然』といふことは容易である。だが問題は、それが理論的必然性をもつて主張しうるかどうかにある。この場合、技術的變革がつねに必然に農業恐慌に導くといふ命題と、技術的變革が農業恐慌の發生に關して重要な役割を、いな時として決定的な役割を擔ひうるといふ命題とが互ひに異つた主張であることは、いふまでもない。さらに

1) 本誌第三十三卷第四號の拙稿『ゼーリング教授の農業恐慌論』參照

スツデンスキイは、農業上の技術的變革は工業上の技術的變革に規則的に追隨し、そして兩者の交互的循環は農產物價格と工產物價格との缺差シユレの交替をもたらす、と説く。農業上の技術的變革が間歇的に出現するといふことについて彼のあげた理論的諸根據は一應傾聴に値ひするが、工業上の技術的變革が農業上の技術的變革に規則的に前後して出現するとは、何を根據としていひうるか。にわかに承服しがたい。農業上の技術的變革の間歇的出現を農業それ自體の特殊性によつて基礎づけた彼自身の立場よりすれば、工業上の技術的變革の間歇的出現をみづから否定したと同じことを意味しないであらうか。いづれにせよ、彼の理論はなほ粗雜たるを免れぬ。また嚴密に史實とも合致しないやうに思はれる。

ゼーリングにうつらう。およそ農業の擴張再生産は、二つの方途によつて可能である。一つは耕作面積の外延的擴大であり、他は同じ耕地における集約度の強化だ。ゼーリングがこの二つの場合を念頭にいられてゐることは、我々のすでに見た通りである。ところで、耕作面積の外延的擴大によつて收穫の増加を期待する場合に、ゼーリングの如く、農產物の價格が必然に騰貴すると見る考へ方の裏には、いふまでもなく、耕作の順位は必然に豊度の高く位置の良好な土地より豊度の低く位置の不便な土地へと下降するといふ考が横たはつてゐる。従つてゼーリングの主張する農產物價格の必然的騰貴論が成立するには、その前提たる耕作順位の必然的下降論を證明しなければならぬ。この前提が證明されぬかぎり、ゼーリングの主張は少くとも完全には成立しえない。では證明は可能であるか？答は、考察を世界的規模において行ふか、それとも一國民經濟だ

けにかざるかによつて、異なるであらう。ゼーリングはもつぱら、國土狹少にして未耕地に乏しいヨウロッパの高度資本主義諸國を主眼としてゐるらしい。この場合には、彼れの推論はともかくも首肯することができ。しかし、世界經濟全體として、すなはち未耕地に恵まれた植民地をも入れて考へる場合には、答は必ずしもゼーリングの如く簡單ではありえない。むしろ肯定を逡巡せしめまたは制限する契機の少くないことを見出すであらう。我々は、耕作の順位が豊度の低き土地から豊度の高き土地へ逆に上昇する可能性を理論上充分に考へうるばかりでなく、その歴史的實例をももつてゐる。殊に植民地においては、位置の便否が極めて重要な役割を演ずるがゆゑに、耕作はむしろ上昇列次をとつて進行することは、一般に知られた事實である。耕作の順位は、世界的規模においてかつ長期にわたつて考察するかぎり、時に上昇列次をとり時に下降列次をとつて進行したし、またするであらう。社會的生産の一般的進歩、交通機關の發達に伴ふ市場の開拓は、この過程をさらに錯雜ならしめたし、またならしめるであらう。單純なる耕作順位の必然的下降論に立脚するゼーリングの説は、いささか疎漏に失するやうに思はれる。

次に、集約度の強化によつて收穫が増加する場合、農産物の價格が必然に騰貴すると見るゼーリングの考へは、いふまでもなく、同一の土地に對する繼起的な等量の資本および勞働の投下はより少き收穫を結果するといふかの土地收穫遞減の法則のうへに立つものである。だが、この古典的な法則の射程はいろいろの意味で限局されたものであることを忘れてはならぬ。もちろん我々といへども、農業の自然的・技術的制約を輕視し、または無視しようとするものではない。たゞ

自然的・技術的契機にのみ過大の評価を許して、爾餘の契機に眼を蔽ふが如き態度にあきたらぬのである。いや、我々はこれと反對に、社會的・經濟的契機をより重要視することの合理性と必要とを強調したく思ふのである。總じて借地料の負擔や土地購入に必要な不生産的資金の調達は、まさに農業の擴張再生産の死重として、深甚の意義をもつてゐる。それは土地所有と土地經營との分離の問題だ。あるひは土地私有制と農業生産力との背反の問題だ。この點に關する正當なる理解と評價となくしては、農業の資本主義的發展過程の一斷層である農業恐慌の本質の把握は、おそらく所期しえないであらう。これを當面の主題についていへば、十九世紀前半のヨーロッパ農業の黄金期における借地料および地價の昂騰が、ヨーロッパ農業の爾後の合理的經營にやうやく本質的な限界を劃せんとしてつゝあつたことこそは、末葉における海外の低廉な穀物大量の競争をきつかけとして、ヨーロッパ諸國の農業がなぜあのやうな恐慌の深みに沈溺したかの秘密をとくべき重要な鍵である。¹⁾

耕作順位の下降に立脚するにしろ、土地收穫の遞減に立脚するにしろ、とにかくゼーリングが『農産物購買力増進の法則』の絶對的把持者であることはたしかだ。といつて、もちろん技術的進歩が往々右の『法則』の貫徹を妨げることが看過してゐるわけではない。それにも拘らず彼が、あくまで『法則』の必然性を力説してやまないのはなぜか？我々はもう一度ゼーリングそのひとの説明を回想しよう。彼はいふ、『しかし、あらゆる一つ一つの時點においては、與へられた技術をもつて計算すべきである。それゆゑ、農産物の需要は供給を凌駕し、農産物の價格は工産物の價格

1) Kautsky; Die Agrarfrage. S. 194 ff. S. 239 ff. リヤシチエンコ、農業恐慌の理論 (直井氏譯) 一九三一年刊、一一八、一一九頁

を凌駕するといふことは、つねに根本的な傾向である²⁾』と。何よりも奇怪なのは、こゝで彼は傾向を問題としながら、一時點における技術の一定に法則の基礎を求めてゐる、といふことだ。だが法則は、一定の時點における價格決定に關聯するのではなくて、むしろ長期の價格運動に關聯する。従つて技術の問題は、單なる瞬間的事實にあるのではなくて、むしろ長期の經過にかかつてゐる。後者が問題であるかぎり、ゼーリングの如く、一時點における技術の一定に基づいて法則化することは、甚だしく意味を失するであらう。それはあたかも技術の進歩を除外してかゝるのと同じことではなからうか。

しかしゼーリングの『農產物購買力増進の法則』は、實は農產物價格それ自體の騰貴に關するよりも、むしろ工產物價格に比しての相對的騰貴を本來の内容とするやうに見える。農業の技術的進歩が工業よりも緩慢なことは事實である。ゼーリングはこの事實に立脚して、すなはち農業と工業との生産力の發展のテンポの相違に立脚して、右の法則を基礎づけるのであるか？必ずしもさうではない。むしろ彼れの特徴は次の點にある。すなはち工業はつねに過剰生産の傾向を孕むに反して、農業は需要の不斷の増大に對してつねに相對的過剰生産の傾向を有し、従つて農產物の需要は供給を凌駕するといふ見解がそれだ。これは結局のところ農業における過剰生産の必然性を理論的に拒否するにほかならぬが、果して彼の如く、過剰生産を農業の根本傾向として斷定し去ることの當否は、少くとも世界經濟全體について見るかぎり、なほ充分に疑問の餘地がありうるであらう。假に一步をゆづつて未墾地の乏しい高度資本主義諸國における農業の過剰生産の

2) Sering; Agrarkrisen u. Agrarzölle. S. 9.

傾向を認めるとしても、農業生産の自然的制約にのみ根據を求めることは、明かに失當である。ゼーリングの農業過少生産論は、たゞ彼によつて立つ普遍主義的見地の投影にすぎないであらうが、我々はこゝでも農業生産の社會的・經濟的制約に再度の注意を喚起せねばならぬ。

二、すでに見たところによれば、ゼーリングもスツデンスキイも共に十九世紀末の農業恐慌の原因を低廉な穀物の供給過剰に求めてゐる。それは需要の側にではなく、もつぱら供給の側にのみ決定的な意義を見出した點において、全く軌を一にしてゐる。だから双方とも生産のみが問題であり、耕作面積の激増や收穫高の激増のみが論議の中心を形づくつてゐて、需要または消費の側における變化の有無は秋毫も問題とならない。恐慌を特徴づける價格下落は生産と消費との不均衡の結果であり、さうして生産の増加が決定的な因子であつた、といふ。けれども、他方においてその間に消費が相對的に増加したかどうか、すなはち人口一人當り消費量の増減如何は、なほ吟味に値ひする問題として残るであらう。いづれにせよ、消費の側に何らの分析をも加へなかつたことは、少くとも研究の不備の一つとして指摘されねばならない。

このことと關聯して問題になるのは、ゼーリングのいはゆる『充溢』(Überfluss)なる言葉の意義である。我々の見たところによれば、さながら人口増加のテンポに對する食糧増加のテンポの凌駕、人類の欲望に對する穀物の絶對的過剰として、それは把握されてゐる。物の、使用價值の過剰が、彼自身の言葉をかりていへば『幽霊の如くだしぬけに』、人類を壓迫したかのやうに物語られてゐる。かやうな對比の仕方は、だがいふまでもなく、根本においてマルサス流の普遍主義的

な考へ方だ。従つてまたゼーリングにとつては、問題の全意義は人口對食糧、人口對耕地面積のみにあつて、それ以外にはありえない。資本主義の發展に伴ふ大衆の購買力の變化の如き、一顧にだも値ひしなかつたのも、むしろ當然といはなければならぬ。彼はひたすら過剰を力説するに急で、低廉さの原因乃至意義を究めるにさへ、必ずしも忠實ではない。

十九世紀末の農業恐慌に關するゼーリングとスツデンスキイの根本的對立は、低廉な穀物大量の充溢を喚び起した直接の原因に關する見解の相違にかゝつてゐる。すなはちゼーリングはこれを、舊來の集約耕作に對する新たに出現した海外の粗放耕作の壓迫、未墾地の急速な開拓による農産物の『ノルマルな價格運動』の一時逆轉に歸するに反して、スツデンスキイは技術的變革による集約的耕作の異常なる發展、新技術による舊技術の清算過程に求めたのであつた。この點に關しては、我々はゼーリングの説により多くの妥當性を認めたい。前世紀末においてヨーロッパの農業が海外の穀物の競争のもとにいはゆる構造的變化をとげたことは事實であるが、この構造的變化そのものが恐慌の原因ではなくて、むしろ恐慌克服過程の所産であつと思ふ。スツデンスキイの強調する集約化の増大は、恐慌を惹起した本來の原因ではなくて、むしろ一旦發生した恐慌を克服せんがために試みられた努力の結果と見るを正當とするであらう。實際、自由貿易の支配下に直接恐慌の嵐にゆだねられたイギリスでは夥しい耕地が荒廢に歸したし、ドイツでは關稅の庇護のもとにやうやくイギリスの集約化の水準に漕ぎつけたのであつた。アメリカ合衆國の東部における集約化の如きも、穀物耕作それ自體の集約化でなくて、穀物以外の農業部門への移行・轉換

の結果にすぎなかつた。穀作は問題の期間に著しく減退したのである。總じて新開地においてはたとひ自然的豊度はさほど高くななくても、上層に多くの分解しやすい植物營養素を蓄積してゐるがゆゑに、粗放經營をもつてしてもなほ長期間にわたつて收穫を與へることが出来る。問題の場合における穀物の大量生産は、土地の豊度が高いか又は勞働の生産力がより高いために、エーカー當りの收穫が大であつたことの結果ではなく、むしろ右に述べた如き上層の耕作を許すエーカー數の大なることの結果である。けだしこれらの土地の耕作は、舊文化諸國に比して極めわづかの費用しか必要としなかつたからだ。これに反して舊文化諸國では、所有上の關係や、未耕地の價格が高價な既耕地の價格によつて決定されるといふ關係のために、こうした經營の外延擴大は不可能に屬したのである。

二

十九世紀末の國際農業恐慌をめぐるゼーリング對スツデンスキーの論争とそれに關する若干の批評と考察とは、以上の敘述をもつて、不充分ながらもほゞこの稿の意圖を達しえたかと思ふ。が我々は、さらになほ一二の簡單な補遺を加へておきたい。その一つは、農業恐慌と交通機關の發達との關聯の問題だ。ゼーリングもスツデンスキーも交通機關の發達を十九世紀末の農業恐慌の有力な一原因として認めてゐることは、さきに言及したところであるが、兩者とも何ら立ち入つた説明を試みてゐない。その他、ベルリン景氣研究所やヤスニイ等は、交通機關の發達を十九世紀末の農業恐慌の決定的原因と見做すにも拘らず、これまた別段の説明を與へてゐない。

1) Vierteljahrshefte zur Konjunkturforschung. 1930. 5. Jahrg. 2. Jasny; Die neuzeitliche Umstellung der überseeischen Getreideproduktion und ihr Einfluss auf den Weltmarkt. 1930. S. 77 ff.

元來、農産物はその經濟的價值のわりに頗る龐大な容積と重量を有するものであり、また肉類蔬菜、果實、乳等は長距離の輸送に堪えぬ性質のものである。従つて交通機關が未發展の域にある間は、輸送費は甚大の額にのぼり、それだけ農産物の價格を高めるがゆゑに、農産物の供給は自然、極めて限局された距離以上に及びえない事情のもとにあつた。かくて市場における農産物の供給は地方的境界を有し、都市の近傍にかぎられてゐた。このことは農業に一種の獨占を許し都市の消費大衆を擄取することを可能ならしめると同時に、借地料の昂騰をもたらしした。

のみならず鐵道の敷設も、それが舊大陸の高度資本主義諸國に限られてゐた間は、大した變化をもたらしなかつた。それは都市の市場に對して生活資料の新しい資源を開き、都市の市場を大いに擴張するに役立つただで、借地料の下落をもたらしなぬばかりか、反對に西ヨーロッパのいたるところで前世紀の七十年代まで借地料の急騰をさへ惹起した。地主の數は急速に増加し、借地料の額は激増した。それは取りも直さず土地の私的所有と資本主義的商品生産の課した重荷にほかならぬ。ヨーロッパ農業は自己に課せられたこの重荷を消費大衆に轉嫁しえたかぎりには、その潜在的行き詰りを糊塗することができたが、七十年代以後における海外後進諸國の鐵道網の擴大に伴ふ低廉な穀物のヨーロッパ市場への大量的進出は、ヨーロッパの農業をして資本主義制の課した重荷の轉嫁を不可能ならしめた。ヨーロッパの農業は、いまやみづからそれを負擔せねばならぬ。そこに世紀末における農業恐慌の本質が横たはつてゐたのである。ヨーロッパの農業を脅したものは、海外穀物の數量であるよりも、むしろ生産條件の相違であつたといふことができる。²⁾

2) Kautsky; Die Agrarfrage, 1899. S. 233 ff.

三

補遺の第二は恐慌の地理的範圍についてである。前世紀末の農業恐慌の中心地帯がヨーロッパであつたことは一般に認められるところだ。しかしそれと同時に、合衆國の一部にも極めて激烈な農業恐慌を喚び起したことを看過してはならぬ。ゼーリングもスツデンスキイも、農業恐慌がヨーロッパのみならず合衆國にもあつたことを語つてはゐるが、もとより精細ではない。これに反して、前世紀末の農業恐慌は單にヨーロッパのみを襲つたに止まり、合衆國では農業恐慌がなかつたとなす説がある。ヴァルガの如きその適例であらう¹⁾。彼はこれをもつて、戦後の國際農業恐慌を前世紀末のそれから分つ本質的な相違の一つであると述べてゐる。併しこれは史實と相容れぬ點で明白に誤謬である。論者は、合衆國の耕作面積の總和が前世紀の七十年以後たえず増大したことを最重要の根據とするやうに見えるが、それは何ら確實な立證材料たりえない。何となれば、合衆國の耕作面積の總和の増大は合衆國の一部に於る耕作面積の減少をも包含しうるから。我々は以下この問題に關し、ヘルマン・レヴキイを典據として簡単な附記を試みようと思ふ²⁾。レヴキイの論文はその副題の示す如く『合衆國の東部に於る農業不況の經過に關する一研究』であるが、官廳の調査報告を豊富に驅使してゐる點で相當に信憑しうるものの如くである。

一、合衆國の東部、わけても北大西洋地方のニュー・イングランド、ニュー・ヨーク、ニュー・デラーシイ及ペンシルバニアの諸州の穀物耕作は、前世紀の第三四半期頃まで繁榮してゐたが、爾後九十年代の中ごろまで激烈な恐慌に陥つた。即ち此等の諸州は、一八五〇年には合衆國の穀物總

1) ヴァルガ 世界經濟年報 第九輯 五二、五三頁

2) H. Levy; Zur Geschichte der Agrarkrisen. » Jahrbücher für Nationalökonomie u. Statistik 1904. III Folge, 28. Band. S. 471 ff.

産額の一・九・五%、小麥總額の三・二%をしめてゐたが、恐慌後の一九〇〇年には前者が五・二%、後者は五%に激減した。而も注意を要するのは、相對的割合ばかりでなくその絶對額も激減したといふことだ。試みに耕作面積のほゞ相等しいイギリスと比較すれば、左の如くである。

	合衆國北太平洋地方		イギリス	
	一八八〇年	一九〇〇年	一八八一—一八八五年	一九〇〇年
小麥	二、四一〇、七五八 ^{エーカー}	二、二一三、五八七 ^{エーカー}	二、五六三、四二九 ^{エーカー}	一、七七四、五五六 ^{エーカー}
燕麥	二、九〇六、九二九	二、七九二、二九六	一、六二〇、六三六	一、八六〇、五一三
大麥	四一〇、〇四一	一四五、一三一	一、九〇〇、三九二	一、六四五、〇二二
裸麥	八一三、八四一	五七五、〇八六	三九、九六六	四六、一〇二
總額	六、五四一、五六九	五、七二六、一〇〇	六、一二四、四二三	五、三二六、二〇三

右によると、一八八〇年から一九〇〇年までの二十年間に双方とも穀作は著減したが、合衆國東部の減少はイギリスより一萬七〇〇〇エーカーだけ大きい。疑ひもなく、國內關稅のしかれてゐなかつた合衆國の東部は、自由貿易のもとにあつたイギリスと同様に、新開地の低廉な穀物の競争によつて極度の壓迫を蒙つたのである。穀物以外の生産部門なかく飼蓄の收益も西部の競争によつて同じ窮境に陥つた。交通運輸の改善とともに、中央北部、中央南部および西部の牛の飼育が増加するにつれて、東部のそれはますます減少した。すなはち北大西洋諸州の屠蓄は、一八八〇年の五七九萬七〇〇〇頭から、一九〇〇年には五〇八萬二〇〇〇頭に減少した。

そればかりではない。ヨーロッパの諸國は、ひとたび穀作および粗放的牧蓄の収益の遞減にあふや、バタの製造に轉じて収益の埋め合せをつける通路を發見したが、合衆國の東部ではバタ製造までが次第に引合はなくなつた。といふわけは、冷蔵車の採用によつて遠方から低廉なバタを運搬することが可能となつたからだ。舊式な小規模經營を固守してゐた東部のバタ製造は衰運の一路をたどる一方であつたが、これに引き換えて中央北部および西部では蒸氣を應用した大規模の酪農業の出現によつてより安價に生産しえたので、ますます隆盛に向つた。同じことはチーズにも當嵌る。左に統計をかゝげよう。

年	バ タ 生 産 高		チ ー ズ 生 産 額	
	合 衆 國 全 土	北 大 西 洋 地 方	合 衆 國 全 土	北 大 西 洋 地 方
一八八〇	七七七、二五〇、二八七 <small>ポンド</small>	二六六、二二六、〇一九 <small>ポンド</small>	二七、二七二、四八九 <small>ポンド</small>	一四、六八一、二八三 <small>ポンド</small>
一八九〇	一、〇二四、二二三、四六八	二四六、七八八、五四四	一八、七二六、八一八	六、六九三、六七一
一九〇〇	一、〇七一、七四五、一二七	二〇六、二八四、四五一	一六、三七二、三三〇	四、五〇九、一九九

チーズの生産は合衆國全體として減少したが、就中東部は最も激甚であつた。之に反して西部では、一八八〇年の約三〇〇萬ポンドから一九〇〇年には五五〇萬ポンドに増加してゐる。バタの生産に就ていへば、西部の農民は東部の農民をその最も近くの販賣中心地から益々撃退した。一八九七年ニュー・ヨークに於て販賣されたバタの八七%は西部産出品のしめる所となつた。

絶對的な自由貿易の支配せるイギリスでは、合衆國の競争によつて穀作は破滅に陥つたが、しかし牛の飼養は合衆國の競争に拘らず一八八〇年以後もますます増加し、バタの生産は引合つた。しかるに合衆國の東部では、西部および南部における農業の開発によつて、單に一部門のみならず、從來最も重要な地位をしめてゐた穀作・飼畜・バタ製造の三部門とも一樣に重大な打撃を蒙つてますます驅逐された。

要するにヨウロッパと類似の事情のもとにあつた合衆國東部は、新開地に地理的により接近してゐただけ、最も強烈な農業恐慌にさらされたことはたしかである。八〇年代には農場が大量的に放棄され賣却された。いはゆる『荒廢農場』はニュー・イングランド州の特色となつた。總じて無住の農家が諸地方で見られた。荒廢農場は、一八八九年ニュー・ハンプシャー州で一〇〇〇をこぞへ、一八九一年マサチューセツツ州では九〇六をこぞへた。かやうな農場は、通常は耕作のみに依頼した經營であつた。一八八〇年から一八九〇年にかけて、他の地方の農場の數は急激に増加したのに北大西洋地方の農場は六九萬六一三九から六五萬八五六九に減少した。農家の子弟はもはや東部に止まることを欲しないで、陸續として西部に移住し、大きな穀作農場を經營するやうになつた。

二、九〇年の中ごろ以來、しかし決定的な好轉が現はれた。一九〇〇年のセンサスによると、北太平洋地方の農場は減少の傾向を停止し、再び増加の傾向に轉じたことを示してゐる。すなはち農場の數は一八九〇年の六五萬八五六九から一九〇〇年の六七萬七八八に増加したのである。荒廢農場の大多數が九〇年代のはじめから再び經營されるやうになつた。この期に擡頭したもの

は、急激に増大する人口と東部の都市の發展に基づく需要の増大に應じ、しかも西部および北部からの遠距離の輸送に適しない農産物の生産であつた。

第一に指を屈すべきは生乳とクリームの販賣だ。一九〇〇年 ニュウ・ヨーク市に於る生乳及びクリームの販賣は一八九五年に比して二二・二%増加した。同様な現象は東部の大都市ボストン、ヒラデルヒア、ニュウ・ハズン等にも見られる。このやうな事情に對應して、北大西洋地方の生乳の産額は一八七〇年の一億八六〇〇萬ガロンから一九〇〇年の八億八一〇〇萬ガロンに著増した。それは合衆國の全産額の約四〇%に相當する。クリームの生産に於ても北大西洋地方は全國の先頭に立つた。合衆國の全産額二〇七六萬八六六二ガロンに對して、北大西洋諸州は一〇四四萬二五〇五ガロンで、前者の半ばをしめた。東部に於る屠蓄の數は一八八〇年來常に減少したが、乳牛の數は一八八〇年の三一九萬七四五頭から一九〇〇年の三四九萬六二六六頭へと増加し、同時に一頭當りの搾乳量は一八九〇年の四二八ガロンから一九〇〇年の五三三ガロンに激増し、他の諸州の平均を遙かに凌駕した。乳生産の増加はバター生産の減少を補つてなほ餘りがあつた。

その他新に擡頭した、部門として動物性生産では鳥および蜜蜂の飼養があり、植物性生産では蔬菜および果樹の栽培が急激に勃興したことは、注目に値ひする點である。かくして合衆國東部の農業は恐慌を轉機として全くその外貌を變化した。生活水準の高い保守的な生え抜きのアメリカ農民は、この過程に適應する能力に乏しかつたため、いづれも沒落し、新たに、生活水準のより低い進歩的・活動的な外來の移住農民が、入り代つてこの繁榮を築き上げたのである。(完)